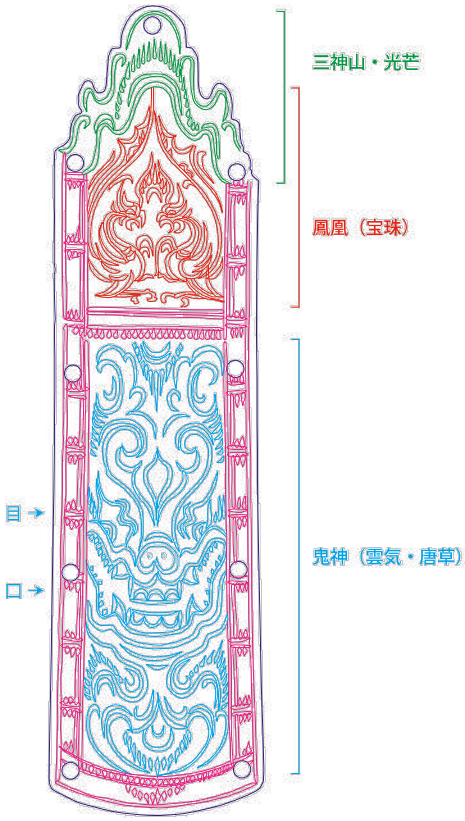
写真１

表面

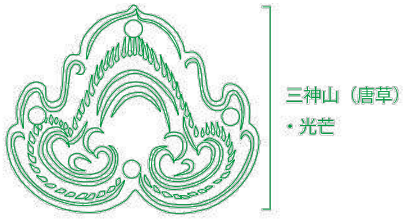


（表面文様模式図）

裏面

写真２

表面



（表面文様模式図）

裏面

写真３

表面

裏面

（表面文様模式図）

0　1:1　3cm

※文様の解釈は報道提供時のもの

今回確認された須津千人塚古墳の金銅製帯金具と文様の内容

今回確認された須津千人塚古墳の金銅製帯金具（集合）

須津千人塚古墳の帯金具や文様を考える上で参考となる資料

１．朝鮮三国時代の帯金具の例（東京国立博物館蔵：金・銀製帯金具／６世紀）

２．帯を着用した鬼神が描かれたタイル〔韓国･扶余 窺岩面〕
（東京国立博物館蔵：蓮花鬼神文磚／７世紀）

４.三神山が表現された冠装飾〔韓国・扶余 陵山里中上塚〕
（韓国・国立中央博物館蔵：金銅透彫金具／６～７世紀）

３．鬼神（獅子）や宝珠文、唐草文が意匠化された錦
※復元図（原資料　東京国立博物館蔵：法隆寺献納宝物・
赤地獅嚙火焔宝珠入雲気繋文経絣／７世紀）

５.三神山が表現された木棺の装飾金具（韓国・益山 双陵）
（韓国・国立中央博物館蔵：金銅棺装飾／７世紀）

【画像の出典】 １・２ ： ColBase (https://colbase.nich.go.jp)
３ ： 東京国立博物館 2025『染織２ 錦』法隆寺献納宝物特別調査概報 44 掲載図を一部加工
４・５ ： 国立中央博物館 HP

富士市報道提供資料

富士市指定史跡

須津千人塚古墳の概要

須津古墳群のなかの千人塚古墳

千人塚古墳は、飛鳥時代（7 世紀中頃）に駿河湾の奥部にそびえる愛鷹山南麓に築かれた、横穴式石室を有する古墳です。千人塚古墳のすぐ西側を流れる須津川の一帯には、総数 200 基を数える須津古墳群が展開しており、当古墳は特に東岸の支群の中核をなすものであるとの理由から、まず昭和 51 年（1976）に地表に残る墳丘と石室部分が市の史跡に指定されました。その後の発掘調査を経て、令和 6 年（2024）6 月には地表下に残る周溝部分のほか、近接して築かれた 3 基の横穴式石室墳を加えた範囲が追加指定されています。富士市では同年 7 月から整備工事を実施し、令和 7 年（2025）11 月 1 日には（一社）須津地区まちづくり協議会との共催にて整備完成記念イベント「古代から未来へ」を開催し、一般公開に至りました。

飛鳥時代のスルガを代表する横穴式石室と副葬品

指定後の発掘調査により、千人塚古墳は幅約 3 mの周溝を有する直径約 21 mの円墳と判明しました。また、埋葬施設は静岡県東部では最大級となる全長 11.5 m、中央部幅 2.05 m、石室高 2.35m の無袖形横穴式石室であり、石室内には礫敷きによる床面上に組合式箱形石棺 3 基と屍床 1 基を設置することで、最低 4 回の埋葬がおこなわれたとみられます。

石室内の調査では、金銅製飾金具、丸玉、大刀、金銅製刀装具、鉄鏃、弓金具、砥石、鎌、刀子、馬具、銅鋺、土器などの遺物が出土しています。3 組の馬具のうち、1 組は帯金具等に飛鳥時代の仏像装飾と関係のある意匠が毛彫文によって施された大変希少なものです。また 2024 年の調査では、流麗な唐草文で彩られた装身具の一部とみられる飾金具も出土しており、これらは被葬者と倭王権との深い関係性を示す資料といえます。

死後も主を支える小円墳群

千人塚古墳の背後に立地する径 10 m前後の小円墳は、いずれも 7 世紀前半から後半にかけて築造されたものです。これらの古墳には、その立地や石室規模、副葬品の内容などから、千人塚古墳の首長の下で地域経営を支えた、ほぼ同世代の集団が眠っていると考えられます。現在も残る古墳群の景観によって、生前の社会関係が表現されているとみてよいでしょう。

文化財保存活用区域の拠点史跡として

富士市の須津地区は、文化財保存活用地域計画において、多様な文化財が集中する文化的空間の創出を目指す地区（文化財保存活用区域）に認定しています。須津古墳群では、市と地区との共催により、これまでにも継続的に文化財関連イベントを実施していますが、千人塚古墳の公開後はさらに利活用を図っていく予定ですので、今後の展開にもご期待ください。

▲千人塚古墳の横穴式石室内部（整備後）

▲整備完成状況（南から）

▲千人塚古墳を中心とする古墳群の群集イメージ